

謡曲の古筆切

——伝頼阿筆『春日龍神』断簡及び伝称筆者未詳『采女』断簡（天文十二年奥書）

石 澤 一 志

一

謡曲の古筆切（個人蔵）について報告する。一点目は、鎌倉時代後期から南北朝にかけて活躍した、二条為世（一二五〇～一三三八、八九歳）門下の和歌四天王のひとりである頼阿（一二八九～一三七二、八四歳）を伝称筆者とするものである。以下に書誌を示す。

大きさ、縦二六・三糎、横一四・一糎。字高、一二・五糎前後。一面に八行を記す。料紙は楮紙。裏面に淡墨で「七十七」と記す。⁽¹⁾ 料紙右端に余白なく、左方は余裕があるところから見て、やや縦長の四半本で元は袋綴か。⁽²⁾ 「琴山」印（古筆本家）を捺した極め札「頼阿法師^{みとりの}（琴山）」が附属するが、印面から判断するに偽印⁽³⁾であろう。本文を翻字して示すと以下の通り。

歌仙伝抄

三十一の

こゝろのそとよりうつろひてくるもの
 じつと月のお母のまへにあらうに
 いふれんはな新まゝに金けのそとより
 多雨いふそと月のおそとに雲のそと
 舞つたのそとにそとにそとにそとに
 りそとにそとにそとにそとにそとに
 とつてそとにそとにそとにそとに
 唐いそとにそとにそとにそとに

【翻字】

みとりの空色もうつるうなはらのおき

行はかり月の御舟のさほの河原にうかみ

いづれは八大龍王はやつのかふりをかたふ

け所はかすか野、月のみかさの雲にのほり

・とふひの野守も出て見よやまのたんしや

うしゆふうの説法さうりむのうめつ悉

をはりて是まてなりや明恵上人さて入

唐はとまるへしとてんはいかにわたるまし

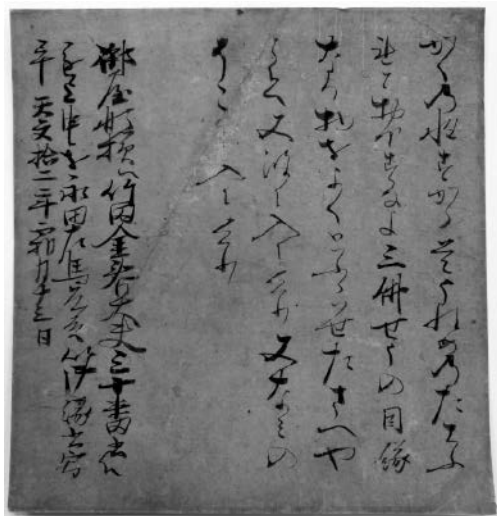
本文内容は『春日龍神』の巻末に近い部分にあたる。現行の謡本の詞章と比するに、本文に若干の異同が見られる。^④博士・節付けなどは見られない。なお、全体的に左右反転した文字の裏写り・墨映が見られるが、前後に該当する本文は見あたらず、詳細は不明。後考に俟つ。^⑤

伝称筆者の「頼阿」と本文に見られる「明恵上人」の本文から、何らかの散文作品の可能性を見て手許に留めておいたものである。果たして、内容は『古今著聞集』などに伝わる内容を基として成立した『春日龍神』の詞章を記したものの、謡本の断簡と考えられる。

もとより、伝称筆者については鑑定者の素性も含めて、全面的な信を置くことはできないものの、当該断簡の筆跡自体は、若干頓阿の筆跡に似通う部分^⑤はあり、書写年代も南北朝からおそらくは室町前期を下らない。『春日龍神』の伝本については未調査で、どの程度古い本が残っているのか詳らかにしないが、仮に書写年代を、前に示したように、南北朝から室町時代初期まで見ることが許されるならば、『春日龍神』の作者とされる、世阿弥や金春禪竹の生存・活躍時期と重なることになり、その初演時期の推定とも相俟って、非常に注目すべき一葉であると言えよう。更なるツレ（同じ典籍から断簡化した古筆切）の出現が期待される。

二

もう一葉は、大きさは縦一五・五横、横一四・八糎、六半切。字高は一三・五糎前後。伝称筆者は、未詳。一面行数は、作品末尾の部分であり、明確にし得ないが、九行程度か。料紙は楮紙。元は列帖装（綴葉装）であったものと推定される。裏面に「ツ」「一」の字が記されているがその意味するところの、詳細は不明である。以下に本字を掲げる。



【翻字】

かくの夜すからはうねめのたはふ
れとおほすなよ三佛せうの因縁
なる物をよくとふらはせたまへや
とて又波に入にけり又なみの
そこに入にけり

御屋形様へ竹田金春大夫三十番書候て

進上申候を永田左馬允殿以御縁書写

畢 天文拾二年霜月十三日

本文内容は謡曲『采女』の最末部。本文の詞章としては、現行曲との間に、異同はほぼ見られない。

最後の三行は書写奥書か、又は本奥書にあたるものと思われるが、どちらの可能性もあろう。天文拾二年は一五四三年。「御屋形様」「竹田金春大夫」「永田左馬允」を閲すると、「竹田金春大夫」は金春家六一世喜勝（茂連、一五一〇～一五八三、七四歳^⑦）が該当するかと思われ、そうすると「御屋形様」は、大内義隆（一五〇七～一五五一、四五歳^⑧）ということになる。「永田左馬允」は、伝未詳だが、肥前国大名、龍造寺家重臣の石井兼清女に「永田左馬允室」

とされる女性がおり、石井同様、龍造寺家家臣であろう。

奥書を訓読すれば「御屋形様へ竹田金春大夫三十番を書き候ひて進上申し候ひしを、永田左馬允殿、御縁を以て書写し畢ぬ 天文拾二年霜月十三日」となり、大意を示せば「御屋形様（大内義隆）へ、竹田金春大夫（喜勝）が三十番から成る謡曲を書写し、進上申し上げたが、永田左馬允殿が（御屋形様・大内義隆との）御縁をもってして、書写した」ということになる。「永田左馬允」が「御屋形様」（大内義隆）との関係で、金春喜勝が進上した三十番本を書写させてもらった、という意味であろう。「三十番」でひとまとまりの謡曲の揃い本が、どのようなものであったのか不明であり、この『采女』が何番目にあたったものであるのかも未詳であるので、この奥書が書写時の奥書であったとしても、書写者の名前は当初から記されず、全体の最後に位置する本に、書写の経緯をより詳細に記した奥書が存在していた可能性がある。その場合、その最後に書写者の署名・花押なども記されていたものと思われる。

この奥書が書写奥書であったならば、そこに記される通り、書写年時は天文一二年（一五四三）十一月一日ということになる。またはこれを元にした転写本であったとするならば、書写年代はもう少し下り、江戸初期以降ということになるであろう。

しかしいづれにせよ、大内義隆や金春喜勝の西国での文化活動の一端を示し、それが肥前国にまで及んでいた時期のことを表すものとして、興味深い一葉である。

三

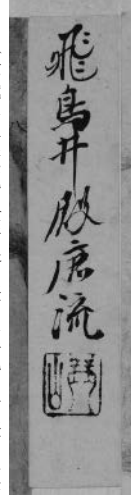
以上、謡曲の古筆切を二葉、報告・紹介した。どちらも現時点では他にツレは知られない。そもそも、謡曲の古写本自体がそれほど多くはないので、その古筆切も決して多くはない。しかし、古筆切研究の深化に伴い、これまで未詳とされてきた断簡の素性が明らかになる場合は増えてきており、さらに情報量の増加により、古筆切のみならずその母体である、古典籍とのつながりが判明する事例も多々知られるようになってきている。この二葉も、この報告がきっかけとなり、あらたなツレの発見と文学史・文化史的事実の解明につながっていくことを期待するとともに、稿者自身もその博搜に努めたい。

注

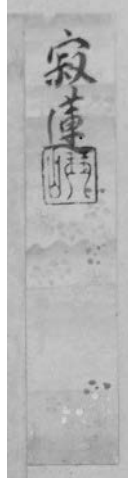
- (1) 当該断簡の四周には糊跡が見られ、手鑑か屏風に捺されていたことが推測されるが、その時点に於ける、通し番号であらう。
- (2) 右端が、袋綴じの書写面をオモテにして山折りされた、折り目の部分に近接しており、左端は綴じ代の部分にあたり、よく見ると綴じ穴かと思われるものが、上下に見られる。左右・天地（上下）共に、化粧裁ちとして、五耗程度、裁ち落とされているものと思われる。
- (3) 印面からすると、初代・古筆了佐のそれに似た印象であるが、了佐の極め札には古筆切の最初の行の四字を記すものは少なく、ほとんどが伝称筆者名のみを記すものであることも、当該極め札が偽印・擬札であることの証左ともなう。



(伝頼阿筆 極札 偽印か)



(伝飛鳥井庶流(雅永)筆 極札 古筆了佐極)



(伝寂蓮筆 極札 古筆了佐極)

(4) 二行目 河原(断簡) — 川つら(現行本文)

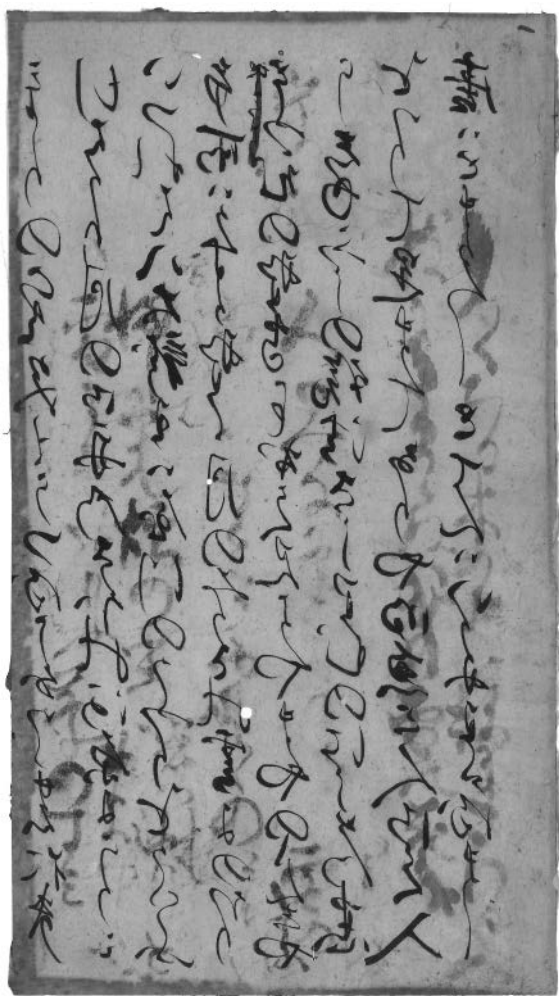
うかみ — うかひ

飛鳥井

五行目 ・とふひの野守 — ナシ

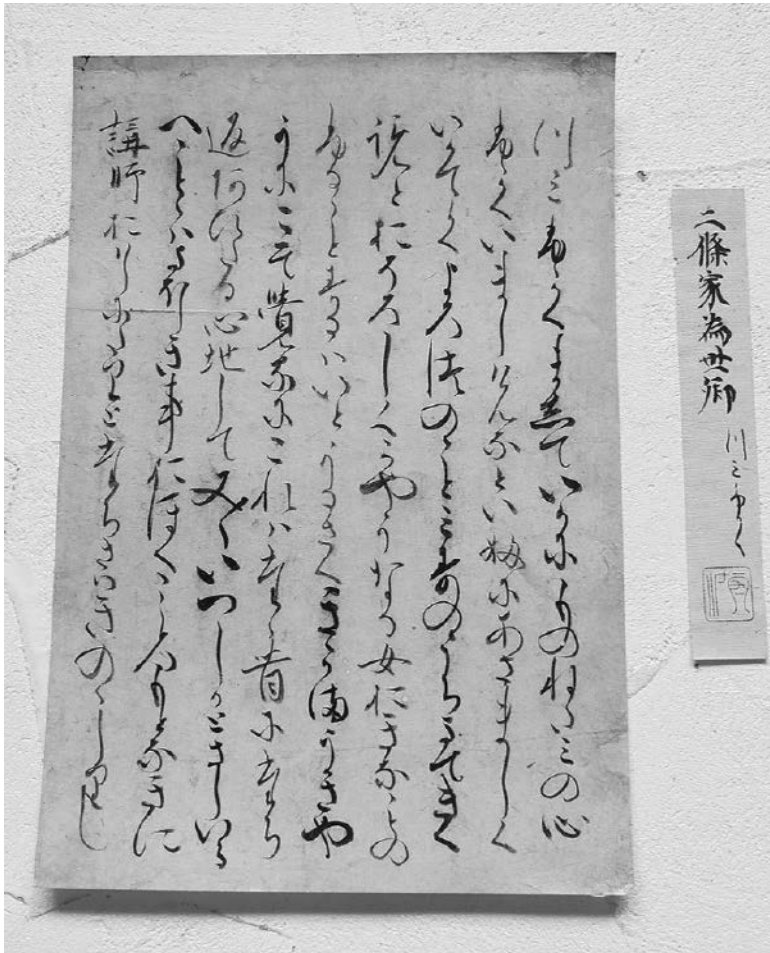
(5)

十分には判読出来ないが、画像を反転させると、その最初の行は、「もろくちる木の（葉）／枝にたまらぬ」の文字が、行頭から約三字下げで記されているのが分かり、和歌が記されていることとである。調べてみると、同一歌は見出されないが、新千載集・冬・630、能管法師に「もろくちる木の葉ながらや過ぎぬらん枝にとまらぬ風のおとかな」の一首が知られるのは注意される。次の行からは、さらに一字下げで文章が記されているようで、歌集などを書写したもののか。先人諸字からの御垂教を乞う。



(九)

(6) 頓阿の師である、二条為世を伝称筆者とする大鏡の断簡を示す。書写年代は鎌倉時代後期から南北朝頃と推定される。



書写の線の肥瘦、太さ・細さのメリハリに共通点が見い出せる。同筆ではないが、伝頓阿筆『春日龍神』断簡が、かなり古い時代の書写と想定されることの証左として、参考までに挙げる。

(7) 金春喜勝は天文一二年当時、三四歳。
(8) 大内義隆は時に、三七歳。

〔付記〕 本稿はJSPS科研費基盤研究(B)「中近世毛利家における知的体系の復原的研究——明治大学図書館所蔵毛利家旧蔵書を起点に」(課題番号/領域番号 231H0065)の助成を受けた成果の一部を含む。猶、本稿で紹介した古筆切はどちらも稿者の所蔵にかかるものである。

**Fragment of an Old Book of Noh Plays:
Fragment of an Old Book of “Kasuga Ryujin”
(Perhaps Written by Ton’a) and Fragment
of an Old Book of “Uneme” (Writer Unknown)**

Kazushi ISHIZAWA

Abstract

This paper reports on the contents of ancient writings on Noh plays. First of all, This is a fragment of transcription of Noh song “Kasuga Ryujin (春日龍神)”, It is said that this was transcribed by Ton’a (a poet from the Northern and Southern Courts period), and is extremely significant as it was written very close to the time when Noh song “Kasuga Ryujin” were created. Next, I will report on a fragment of a transcription of the Noh play “Uneme (采女)”. It is noted that this work was transcribed further from a copy that Konparu Yoshikatsu (金春喜勝) had written for Ōuchi Yoshitaka (大内義隆). It was transcribed on November 13, 1543. It is a valuable piece that gives us a glimpse into the activities of Ōuchi Yoshitaka (大内義隆) and Konparu Yoshikatsu (金春喜勝).

キーワード：古筆切、謡曲、春日明神、采女、頓阿、大内義隆、金春喜勝

Keywords: Fragment of an old book, Noh play, Noh song “Kasuga Ryujin”, Noh song “Uneme”, Ton’a (頓阿: poet from the Northern and Southern Courts period), Ōuchi Yoshitaka (大内義隆), Konparu Yoshikatsu (金春喜勝)